

# 現代家族

全五巻

製作

スタッフ

企脚監撮照音録効美記編助製  
 画本監督影明楽音果術録集督主  
 村山英 杉原 堀内 松田 鈴木 塚山 丸山 小塚 城崎 沼崎 秋葉 桑原  
 治 甲 彦 秀 夫 衛 郎 三 孝 梅 嘉 一 夫

キャスト

中本たみ 荒木道子(文学座)  
 有子 家田佳子(にんじん)  
 及川洋二 笈田勝弘(文学座)  
 花山さん 田中筆子(日活)  
 吉本秋子 木村俊恵(俳優座)  
 横山良平 森川公也  
 文子 中曾根公子  
 おばあさん 原ひさ子  
 氏家理子 佐々木孝子  
 小泉マミ 高杉裕三子  
 竹田さん 戸川暁子  
 玲子 船橋桂子  
 会社の社長 早川寿郎  
 釣屋のおやじ 今村源平  
 釣人 青沼三郎  
 他多勢

貯蓄増強中央委員会

解説

現代の家族の中で、年寄はどういう地位を占めたらよいか。これを映画の中の人間像をとおし、観る人々自身の問題として静かに考えさせようとする。製作された映画である。母一人、娘一人の働く一家と、娘の恋人と、そこに起きた結婚問題が話の中心になっている。……現実には、養子という古い考え方もまだ生きているし、一方には年寄の将来はもう養老院行きと決つたような考え方もある。若い夫婦と年寄の同居の矛盾すら、現実のこととなる。親子の情や経済の問題がからんで、割切りは容易でない。……この解決は極端から極端に走りやすい。これこうした問題は、とかくトラブルになりやすいし、その解決の両面からじっくりとらえて、きわめて現実的な現段階の結論をみちびき出し、観る人々に問題に対する態度を教え、必ず解決の道があることを示唆している。

物語

あるビルの屋上、昼休みで、BGたちが輪になつてグループで山に遊んだ写真を見ている。その一枚に皆がワツとわく。中本有子はそれを奪つて一人で階段を駆けおりた。恋人の及川洋二に雪の中で抱き起こされたところを撮られてしまったのだ。洋二は同じビルの中の会社に勤めている。

今夜も二人はスケートに行く約束をした。青春を楽しむことでは二人は一致するが、結婚のことになると、立場の相違から気もちも自ずとちがつてくる。有子は、病院の病婦をして働いている母のことを考える。そして洋二をこの問題にひっぱりこみ一緒に解決してもらおうとするのだが、洋二はもつと将来を漠然と考へていける。楽しめる間はデートを楽しんで、「結婚しなればならなくなつたらするさ」という態度だ。娘の方が現実的で、職場では長すぎる春などといわれるし、たとえ共稼ぎでも、母と同居しても、結婚したいと思つていない。そして外で遊ぶより洋二を家に呼んで三人で食事でもして母になじんでもらいたいと思うが、洋二はこまかく気がつく年寄が苦手で、よりつかない。

一方、母のたみは「洋二さん、次男なんだし、思いきつて養子に来てくれないかしら」と有子にいう。すると有子は、「古いのね、お母さんたら、いまだき養子だなんて。結婚つていようのね、二人で新しい家をかまえることなのよ」とたみはハツとする。「いざれ私たちが結婚するようになるとして、お母さん、どうかしら？」  
 「どうかしらつて……どういうこと？」  
 「つまらね……」  
 「やつぱり、私はおいていかれるわけかい？」  
 「やめてよ、そんないい方！」  
 母娘もだんだんしつくりいかなくなる。

たみは、職場で同僚の花山さんに、若い先の心細さをもらす。花山は子供なんて当てに出来ない時代なんだから、頼るものはお金だと割り切つていよう。そして日曜日に二人で養老院を見学に行つてみようとなつていよう。有子と洋二も、陽気な会話の果てが、きまつて母をどうするかという問題になる。すると、洋二は結婚の話が避けがたがる。男の見栄として、妻もその母も養えないんじやと気も進まない。

「洋ちゃんには私にお母さんがいるからと思うんでしようけど、どうしようもないじやないの、親なんだもの」  
 「解つてるよ」  
 「私だつて洋ちゃんとは結婚できたら、二人だけになりたいわ」と、いう嘆きになる。

若い二人の仲もしつくりいかなくなる。たみも、とうとう花山さんにさそわれて養老院を見に行つた。それは林の中に小さな一戸建ての案内する環境だつた。そこに独り住む老婆のところへ孫をつれた娘が面会に来て、青草の上で持参のスッなどひろげているなごやかな

情景を目にした。しかし、たみは何だか急に年をとつたような気もちになる。この、母のかくれた養老院調べは、有子にはショックだつた。有子は職場で、親友の秋子に「私もう洋二さんと結婚あきらめようかしら」といつたりして、秋子から、こまできて惜しい、年よりは年よりで考えなまやならなくなつてきたのだ、とはげまされる。が、そこへ洋二がきて、「お母さんが自分でそう考へたのなら、養老院行きもいじやないか」と口をすべらせると、有子はいきなり洋二の頬を激しくひっぱたいた。

有子は男(洋二)が分らなくなる。そしてとうぶん結婚はあきらめて母と暮す考へになつて急に汽車に乗つて雪山へ行く。それは昨年グループで滑りに行つて楽しかった山である。この有子の家出は、たみにも洋二にも大きなショックを与えた。

たみは、翌朝、職場で花山さんから、こうなるとは判つていたよなものとわかれて考へる。洋二も、はじめて、共稼ぎをしても何をしても有子と結婚に踏み切る決心がつく。そして秋子に有子の行先を聞いて迎えに発つ。洋二が雪山へ行き、有子を探している。有子は雪の中で土地の子供たちと雪を投げ合つていた。有子は洋二を見つけてびつくりする。洋二は「まだ解らないのか、よし来い」とはげしく雪を投げつけてくる。二人は雪の中に抱擁する。い全力をそいで、力つきて雪の中に抱擁する。たみも病院の屋上で日を浴びて花山としみじみ話す。有子と一緒に新家庭へ行つてみる。一番つまらない片身のせまい思いをするのは自分だ、子供に頼らず働けるだけ働けるのが一番いいわ、と、足腰が立たなくなつたら、子供も捨ててはおかないだらうし、その頃には年寄の施設ももつとよくなつていっているに違いないと考へる。仲のよい花山さんを見て、たみも明る寄同志の楽しみもあろうと思つて、たみも明るくなる。

夜汽車の中で、洋二と有子はこれからの生活の計画をこまごまとたてる。お母さんとは別居するが、なるべく近所に住んでもらう。自分たちも共稼ぎ、お母さんにもとうぶん働いてもらう。そして自分たちの収入から毎月五千元母にやる。二人の暮しの支出をこまごまと書き出してみると、娯楽費なんてほとんど出ない。でも「今までたつぷり遊んでいってよかつたでしょ」と、二人は思わず笑う。

朝、たみはアパートで娘と洋二を迎える。三人の間に、はじめて心を寄せ合つた、ほのぼのとした三人の会話が交わされる。たみも、働くことの張りあいをまたあらためて感じるのだつた。

上映時間 四十八分